

## マルブランシュの認識論

碓井敏正

1. 認識能力の分析
2. 明晰な認識について
3. 観念の性格
4. すべてのものを神のうちに置いてみるということ。
5. 観智的延長

### はじめに

マルブランシュは真理の探究の序文において、次のように述べている。「人間の精神はその創造者と、物質的被造物の間に位置しており、その神との結びつきが人間にとってもっとも本質的であり、その結合により、精神は生命と光とすべての幸福を得る。反対に精神と物体との結びつきは人間を無限に低めるのである。」<sup>①</sup>ここに彼の哲学の根本原理が明解に述べられている。マルブランシュにとっては純粋に明晰な認識のあり方を確保するためには、精神を神と結びつけることが必須の条件となるのであり、反対に精神を絶えず地上に引き戻す身体は、認識においては全くの桎梏と化しているのである。「すべてのものを我々は神のうちに置いてみる」(Nous voyons toutes choses en Dieu)というテーゼにおいて完結するマルブランシュの認識論は、身体との結びつきを嫌い、神との結合を人間精神の本質とする、上にみたような彼の形而上学的前提から出ているのである。我々の目的は、「すべてのものを神のうちに置いてみる」という時、それが何を意味しているのか、又いかなる仕方であるのか、という問題を論究することにより、マルブランシュ認識論の性格を明らかにしてゆくことである。そのための手続きとして、まず認識能力を吟味することから始めよう。

### 1. 認識能力の分析

彼は精神を構成する要素を大きく悟性(l'entendement)と意志(la volonté)に分けているが、まず悟性からみてゆこう。これを定義してマルブランシュは次のように言う。「悟性とは色々な観念と精神の様々な様態を受け入れる能力である。」<sup>②</sup>ここで言う悟性とは感覚、想像を含めて考えられている。感覚や想像力は「身体の器官を通じて対象を知覚するところの悟性である。」<sup>③</sup>それ故悟性は感覚、想像、純粋悟性の三つの要素から構成されているわけである。

まず感覚についてであるが、彼は真理の探究の第一巻、第一部において詳細に感覚を分析しているが、一言でいうならば、感覚は我々の身体との関連でのみ有用なのであり、認識においては役に立たず、むしろ有害であると考ええる。概ねデカルトの感覚論と変わらないと考えてよいであらう。

う。しかし必ずしもこの立場が一貫しているわけではなく、後期の著作「形而上学対話」などでは感覚に対する柔軟な姿勢がみられる。<sup>④</sup>

次に想像力についてであるが、彼は同じく「真理の探究」の第1巻第Ⅱ部でこれについて膨大な叙述を試みている。そこでは想像力の分析により、人格の相違や、物理的環境—例えば空気のような—の相違から、国による人性の違いなどまで論じているが、注意しておくべき点は、想像を感覚の延長線上において捉えているということであろう。（勿論何かを想像しようとする際の能動的力を加えてはいるが）。それは外的物体を想定するかしないかによって感覚とは大きな違いがあるが、身体の内に関することに関しては量的な差違しかないと言う。即ち、内部神経が精気の流れによって軽く振動される時、魂は想像するものであり、それが想像するものは外にはなく、脳の内にありと人は判断する。反対に内部神経が強く振動する時、その対象が現前していると、魂は判断するのである。

最後に、純粋悟性についてであるが、彼はこれを第Ⅲ部で次のように定義している。「この純粋悟性（*entendement pur*）という言葉によって我々は精神が脳のうちに物的な像（*image*）を形成することなく、外の対象を認識するための能力以外のものを意味しない。」<sup>⑤</sup> 感覚と想像が、人間の身体との結合によって成立するのに対し、純粋悟性は身体とは切離された限りにおいて成立する認識能力であった。即ちそれ自身においてとらえられた精神のことである。結局この純粋悟性だけが固有の意味で認識をつかさどるのである。

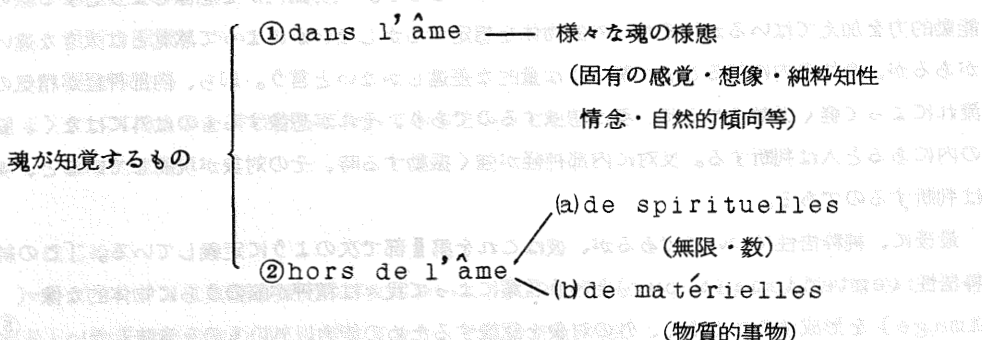
さて、感覚、想像、純粋悟性はひっくり返って悟性の名によって統括されたのであるが、この悟性は既にみたように、色々な観念と精神の様々な様態を受け入れる能力であった。それは完全に受動的でいかなる運動（*action*）も含まないとされた。一方能動性を本来の性格とするはずの意志についてはどうであろうか。マルブランシュの意志に対する考え方は、神との関係で、それにどれだけの能動性を与えるかで一定しておらず、それを定義するのは難かしいが、彼の意志論の特徴がその本質的受動性の強調にあることは間違いない。曰く。「意志は我々を一般的善へと運ぶ自然の創造者の圧力（*impression*）以外の何物でもない。もし神が一般的善の方へ動かさないのなら、精神は何も意志することはできない。」<sup>⑥</sup> 本来の意味で能動性が認められるのは神のみであり、次のように彼が言う時も、それは意志の相対的能動性でしかないだろう。

「ある意味で、それは活動的（*agissant*）であるということができる。というのは我々の魂は、様々な神が与えた傾向（*inclination*）や圧力を限定（*determiner*）することができるから」<sup>⑦</sup>。一般的善を与えるのは神であるが、それに従って個々の具体的行為において善を選択するのは我々の活動性によるというのである。又次のようにも言っている。「意志は運動が物質に対してそうであるように、精神の本質ではないと言われる。というのは、意志することと思惟（*pensée*）を前提とするからである」<sup>⑧</sup>

以上マルブランシュは悟性だけでなく、意志も含めて精神の本質的受動性を説くのである。このことから我々は彼の認識論の受動的性格を知ることができるのであるが、ここではそのことを指摘するだけにとどめよう。

## 2. 明晰な認識

さて、完全に受動的であるとされた悟性は様々な観念と精神の様々な様態を受け入れるのであるが、その両者のいづれにおいて真の認識が成り立つのであろうか。彼は魂の知覚するものに二種類あるとして、次のような分類を試みた。



まず結論的に言うならば、①の領域、即ち感覚や想像や純粹知性の働き等については明晰なる認識は成り立たないということ。そしてマルブランシュが主に問題にするのは②の(b)、即ち物質的事物の認識であるということである。

まず①の領域の認識についてみてみよう。彼は次のように言う。「魂の内にあるものは魂の固有の思惟、即ちそのすべての様々な様態である。というのは、思惟とか、思惟する様態 (manière de penser) とか、魂の様態 (modification de l'âme) とかいう言葉によって、私はそれらを、魂がそれ自身について持っている内的知覚 (sentiment intérieur) によって受け取ることなしには魂の内にありえないようなすべてのものを理解した。例えば、魂の固有の感覚、想像、純粹知性、單純に魂の概念、魂の情念や自然的傾向である。」<sup>⑩</sup>ここに挙げられたようなもの、即ち内的知覚によって我々が受け取るようなものについては、我々は明晰な認識を持つことはできないと彼は考えた。このことを明らかにするために真理の探究における釈明を参考としよう。そこでは魂の内なるものについて明晰な認識を持ちえないということが、より具体的に説明されている。

まず彼は、我々は我々の魂の本性についての、あるいは魂の様態の明晰な観念を持たないと言う。我々はそれについては意識 (conscience) とか内的知覚 (sentiment intérieur) を持つのであって、そのような意識や内的知覚によって、我々は魂の存在を確信することはできるが、魂に関する明晰な認識は得られないというのである。このように彼は明晰な観念と意識的なものを明確に区別するのである。(このことは観念の性格を扱う次節で問題にすることとして、ここでは両者の区別にだけ留意しておこう。) さてマルブランシュは魂に関するものの認識の不完全性、不明瞭性を、物体に関する認識の明晰性と対照することにより浮かび上がら

せる。以下やや長くなるが、彼の所説をみてみよう。彼は言う。我々は延長を認識するよりずっと不完全に魂を認識する。そのことは多くの人の魂に関する無知、身体との分離、その不死性、又その他の特性に関する無知が示している。一方物体はその様態を理解するためには、それを示す観念を参照 (consulter) するだけでよい。例えば、我々は物体が円くなったり、正方形になったり、運動したり、静止したりすることができるということを明晰にみる。即ち「延長 (l'étendue) の観念は明晰だから人は苦もなく、又一見して延長の観念が含むものを、又排除するものを見るのである。」<sup>(11)</sup> 一方精神については、我々にある様態が精神に属するということを見せるような精神の観念を我々は持たない。例えば色について考えてみるならば、それが物体にではなく、魂に属することをハッキリ示すような精神の観念を持たないのである。このことの証拠として彼は、人は延長の観念を注視すれば、円さやすべての形が、物体に属する様態であり、又苦や熱が物体の様態ではないことを知ること、一方魂と魂の様態についてはそう簡単には一致しないという事実を挙げる。苦や熱や、少くとも色は魂に属さないと考える人も居るぐらいなのである。

結局マルブランシュの所説をまとめるならば次のようになるであろう。まず魂に関しては明晰な観念を持たないということ、我々がそれについて何らかのことを知りうるのは、物体の明晰な観念との対照においてであるということである。例えば熱や痛みや色が精神の様態であるということを知るのは、物体にはそれらが属さないということを知ることによってであるという風に。

(このような議論の運び方は彼の物心分離の証明にも表われている。物心の分離を我々が知るのは物体の明晰な観念を通じてであるというのである。<sup>(12)</sup>)

ではマルブランシュが魂の明晰な観念を持たないと言う時、いかなる意味でなのか。言い換えるならば、明晰な観念という言葉によって何を意味しているのか。彼は同じ箇所ですべての三角形、或わすべての正方形と比較することができる。このようにして、人はこれらの形や数の間にある関係を明晰に見出すことができる。が、ある精神と他の精神は比較できない。又快と苦、熱と色、さらに同じジャンルの緑と赤、さらにある紫と他の紫の関係すら明晰に見出すことはできない。このようなマルブランシュの説明をみるならば、我々は彼の言う明晰な観念とは、計量的比較が可能であるような観念であると考えることができるであろう。このような比較が可能でないということを理由として、彼は魂に関しては明晰な観念を持ちえないと考えるのである。

さて、以上の点において我々はマルブランシュ哲学の、デカルト哲学との決定的な相違点を見出すことができるであろう。デカルトにおいては、精神の非物質性から心身の分離へと進むのに対し、マルブランシュは逆に物質に関する観念の明晰性から心身分離へと進むのである。デカルトにおけるコギトの明証性はマルブランシュでは不明瞭なるものとして斥けられている。デカルトは、「私が思惟する限り存在する」ということの確実性と、それが明晰判明な知覚より他に何も含んでいないということから、「明晰判明に知覚するものはすべて真である」ということ

を一般的原理として立てたのであった。だからコギトの原理は彼においてはもっとも明晰判明なものであるべきであった。そこから彼は数学的認識における基準としての明晰判明性の根拠を得てくるのである。<sup>⑬</sup> マルブランシュはそのような根拠を必要と考えなかったばかりか、不明瞭なものとして放棄するのである。では彼における認識の真理性の保証はどうなるのであろうか。この件については4節で検討することになるであろう。ここではマルブランシュの認識論では、認識の真理性の根拠は自己の内においてではなく、他者において得られるだろうということを予感するにとどめておこう。

さて、これまで魂の内にあるものについては明晰な観念を持つことはできないというマルブランシュの所説をみてきたのであるが、では魂の外において我々が知覚するものについてはどうであろうか。彼はこれをさらに精神的なもの、例えば無限や数、と物質的事物との二種類に分類して考える。まず精神的なものに関してであるが、それらについては、我々は観念なしに知覚することが可能であるという。というのは非常に不完全ではあるが、それ自体によって、それらを見ることがありうるからである。もっとも我々が現世において身体のとりになっている間は極めて困難ではあるが。

そこで問題になるのは、最後に残ったところの物質的事物に関するものであるが、これがマルブランシュの認識説において主要な対象となるのである。曰く。「私はここで主に物質的事物について話す。物質的事物は、魂がそれを認識するために、観念が必要でない仕方で、我々の魂に結ばれることはできない。というのは、それは延長しており、魂は延長していないので、それらの間には関係はないからである」<sup>⑭</sup>

以上の文章から分ることは、マルブランシュにおいては、認識の固有の対象は物質的事物であり、しかもそれは観念を媒介としてはじめて知覚することができるということである。そこで次に問題になるのは、マルブランシュにおける観念の意味である。以下その検討にあたることとしよう。

### 3. 観念の性格

彼はデカルトと同じように観念を二様に考えることから出発する。「観念という言葉は二つの意味にとれる。私はしばしば、それを明晰であろうと、混乱していようと、精神にある対象を表わすものすべてを考えた。より一般的に言えば、精神の直接的対象であるものすべてと考えた。」<sup>⑮</sup> しかし彼はすぐ後に続けて述べるのだが、観念をさらに狭い意味で考えている。「同様にそれをより厳密に、又より狭めた意味で捉えた。即ち一見しただけで、かくかくの様態がそれに属するということが、発見できる程明晰な仕方で精神に事物を示すものすべてと考えた。」この狭い意味で捉えた観念がマルブランシュ本来の観念説であると考えてさしつかえないだろう。彼はデカルトの後継者として、意識の様態としての観念という側面を全く無視するわけではないが、デカルトとは異なり、観念の意識からの独立的性格を強調するのである。

さて、そこで、デカルトにおける観念説を若干みてみよう。そのことによってマルブランシュ

の観念説の特徴がより一層明確となるであろう。デカルトは省察の第二論駁に対する答弁の付録で次のように観念を定義していた。「観念という語によって、私はその直接の知覚によって、私とその同じ思惟自身を意識しているおのおのの思惟の形相を理解する。」<sup>⑮</sup>デカルトによれば観念とは「思惟の形相」であるのだが、彼によれば思惟は直接的意識によって定義されるのである。それ故デカルトでは、観念はコギトと一体となっているのである。彼はそこで次のように言う。「私は観念という言葉、精神が直接注意しているものすべてを表わすために使用する。例えば、私が欲するとか、恐れるとかする時、同時に私は欲するとか恐れることに気付いている。このようにして、意欲とか、恐れを観念のうちに数えるのである。」<sup>⑯</sup>又逆にコギトから離れた限りにおいては、何物も観念とは呼ばれない。「私は想像のうちに(en la fantasie)描かれた単なる像(image)を観念と呼ぶのではない。否、私はここにかかるものを、それが身体的な想像のうちに描かれている限りは、言い換えるならば、それが脳のある部分のうちに描かれている限りにおいては決して観念と呼ばず、ただそれが脳のその部分に向けられた精神そのものを形作る限りにおいて観念と呼ぶのである。」<sup>⑰</sup>デカルトの観念説は簡単ではないが、少なくとも言うことは、かつ最も肝心なことは、彼が観念が思惟から独立的なものとは考えていなかったということである。

これに対し、マルブランシュは、すでにみたように観念を二様に捉えることから出発しているが、デカルトとは逆に、観念の意識からの独立性を強調する方向へと進むのである。このことは魂の内において知覚されるものについては明晰な認識を持ち得ないという彼の考え方と結びついている。彼は一方で観念を明晰な認識を与えるものとして考えていたのであるから、不明瞭な意識から観念を切り離そうという方向へ進むのは当然であるだろう。では彼はどのようにして意識的なものから観念を独立させてゆくのであろうか考察してみよう。

彼は観念の持つ性格として、まず実在性を挙げる。観念の実在性は、デカルトにおいては観念の客観的実在性として認められ、観念に一定の独自の性格を与えることとなった。(この客観的実在性をめぐって、これを認めないスコラの学者達と論争がなされている。)マルブランシュはこの実在性をさらに強く考えるのである。曰く、「人は観念が現実的存在であるということを疑うことはできない。というのはそれは現実的な特性(propriétés réelles)を持つからであり、又お互いに異なり、全く違ったものを表わすからである。」<sup>⑱</sup>さらに具体的には次のように言っている。「正方形の観念は、円やある数の観念と異なり、全く異なった事柄を表わす。これらのことは無には起こらない、というのは無はいかなる特性も持たないからである。だから観念が非常に現実的な存在(existence très réelle)を持つということは疑うことはできない。」彼は実在性につづけて、観念の不変性、必然性を強調する。「私は観念が不変であり(immuable)、真理と永遠の規則(loi éternelle)が必然的であるということを確認している。それらがいまあるようなものでないということは不可能である」。

<sup>⑲</sup> 次に彼は観念は、それが表わす対象の完全な認識を与えると考える。「私は我々が延長について持っている観念は、延長が可能であるすべての特性を我々に認識させるのに十分であるとい

いたい。」このテーゼは彼の認識論の合理主義的性格を端的に示している。彼は観念をより厳密には、「かくかくの様態がそれに属するということが発見できる程明晰な仕方で精神に事物を示すもの」と考えたわけであるが、さらに観念を分析することだけで対象の完全な認識が得られると考える。このことは事物は観念によってしか知覚することができないという彼の考えに基づいている。彼は「真理の探究」の第Ⅲ巻、観念の項の冒頭に次のように述べている。「我々が、我々の外にある対象を、それ自身によっては知覚しないということに誰でも賛成する、と私は信じる。我々は太陽や星や我々の外にある無限の対象を見る。そして魂が身体から出て、すべての対象をみるために空へ、いわば出かけてゆくというようなことはありそうにもないことである。従って魂は対象をそれ自身によっては見ないのである。そして我々の精神の直接的対象は、それが例えば太陽を見る時、それは太陽ではなく、我々の魂に親密に (intimement) 結びついてあるものであり、それが私が観念と呼ぶものなのである。」ここでは観念は我々の魂に親密に結びついてあるものとされており、先にみた観念の独立的性格と相容れないように感じるが、この点は観念は神のうちにあるという考え方によって展開を余儀なくされるであろう。ところで、観念が完全な認識を対象について与えるという時、そのような認識の完全性はいかにして保証されるのであろうか。それは観念が神のうちにあることによって、従って我々が神のうちに於いて観念をみることによって（このことは次節で詳しく扱う予定である）保証されるのである。曰く「神のうちにある事物の観念はすべての特性を含む。観念をみるものは、すべての特性を継続的にみることができる。というのは事物をそれらが神のうちにという風にみる時、人はそれをつねに非常に完全な仕方で見るのである。」<sup>22</sup> 物体に関する我々の認識の完全性は、物体を神のうちに於いて、又観念によってみることにより得られるのであった。<sup>23</sup>

最後に注意すべきは、マルブランシュが観念に作用性 (efficace) を与えていたということである。<sup>24</sup> このことは悟性の受動性、観念が神のうちにあるという彼の考え方からすれば想像に難くないことであろう。

さて、マルブランシュが観念にこのような性格を担わせたことの理由は、大雑把に述べるならば、観念のみが物質的事物の合理的な認識を与えることができるという考えが彼にあったが故にであろうと思われる。そのためにまず観念の意識からの独立性を主張したのであろう。意識の様態という規定は、明晰なる認識をこととする彼の観念説とは両立しがたかった。彼自ら言うように、「魂の様態は変化するものであるが、観念は不変である。又魂の様態は個別的であるが、観念はすべての知性にとって普遍的 (universelle) であり、一般的 (generale) である。魂の様態は偶発的である (contingent) のに対し、観念は永遠であり、必然的である。さらに魂の様態は曖昧であり (obscure) 了解しがたい (tenebreux) のに対し、観念はすべての科学の基礎として、明晰に認識される。」<sup>25</sup> デカルトにおいて統一していた意識の個別的な性格と観念の普遍的な性格はマルブランシュにおいては対立し、相克し、前者は後者によって駆逐される。人間の意識から独立した観念は自己のありかをどこに求めるのであろうか。又このような普遍的な性格を持った観念は我々の意識によってどのように捉えられるのか。このことは

神との関連でのみ語られうることであるが、以下このことの究明にあたることとしよう。

#### 4. すべてのものを神のうちににおいてみるということ

マルブランシュは「観念」がいかにして我々に生ずるかについて、いくつかの考え方を挙げ、それらをいづれも斥けることにより、結局「観念」は神のうちにあり、我々の精神はこの神の理性との結合によって認識が可能になるという立場を確立する。その過程をたどることとしよう。

②⑤

まず第一番目に、観念が物体から来るという唯物論的学説を排し、次に我々の魂が観念を造り出すという説を批判する。もとより人間はこのような能力は持ち合わせていない。すべての能動性が神にのみ与えられたマルブランシュ哲学の体系においては、このような説は不そんなものであった。ついで挙げるのは、神が我々の魂を創造する時に、魂とともに観念を作り出したか、或わ神が、人間がある対象を考えるたびごとに観念をつくるという説であるが、これはマルブランシュ自身の考え方とそうへだたてはいいない。しかし、ここで彼は、神の摂理の単純性の原則からこれを斥ける。神は最も単純な方法によって作用するのだから、このような面倒なやり方はしなかったであろうと言うのである。最後の説は、魂がそれ自身のうちに、それが物体のうちに見る完全性を持っているというものである。これは人間が神から独立、ないし神に似ようという望みからくるのであるとして、彼は厳しく反対する。自分自身に対して自然の光でありうるのは神しか存在しないのである。

さてこのようにして、観念の由来について考えられるいくつかの議論に反対し、彼は自らの説を導出しようと試みる。<sup>②⑥</sup> そのために彼は二つの前提を考える。(1)第1番目は「神がそのうちに、彼が創造したすべての存在の観念を持っている。」という命題であり、これは絶対的に必然的であると言う。なぜなら、そうでなければ神はそれらを創造することはできなかったからである。(2)第2番目の前提は次のようなものである。神はその表われによって (*par sa présence*) 我々の魂に非常に緊密に結びついている。従って空間が物体の場所であると言われるのと同じように、神は精神の場である (*le lieu des esprits*) この二つの前提からマルブランシュは次のように結論する。精神が、神のうちにある創造された存在を表わすところのものをみることができることは確かである。このようにして精神は神のうちににおいて神の作品 (*ouvrages*) を見ることが出来るのである。」<sup>②⑦</sup> ただし神が自らのうちにあるものを精神に示すことを望むということが条件になるが。

マルブランシュは上にみたような議論が独断的と思ったのか、さらに二つの証明をこの問題に対して与えている。最初のは次のようなものである。精神は無限の観念を持つだけでなく、それを有限の観念に先立って持っている。というのは、それが有限であるか、無限であるかということを考えることなしに、ただ存在を考えることだけから、無限の存在を理解するからである。だが我々が有限の存在を理解するためには、存在の一般的概念からあるものを必然的に削らなければならない。従ってその一般的概念は先になければならない。このようにして、精神はいかなる

ものもそれが無限について持つ観念の内においてしか知覚しないのである。<sup>28</sup>（ここでマルブランシュの言う無限とは勿論神を意味している。）このような議論は合理論の立場からするものであり、とり立てて目新しいとも思えないが、それがマルブランシュ的であるのは有限の存在を無限の観念の内において持つと述べている所である。即ち我々は個々の物を神の内において見るということである。

もう一つの議論は観念の作用性を根拠としたものである。曰く、「観念は我々に様々に働きかけ、我々を啓発する。ところで何物も、それが精神より優れたものでなければ精神の内において直接に作用することはできない。そのようなものは神しかない。だからすべての観念が神という作用性ある実体の内にあるということは必然的である。」<sup>29</sup>

マルブランシュは、このような二つの議論でもって、「我々はすべてのものを神のうちにみる」という自説を補強しているのである。しかし、このような議論はそのままでは認めがたいと言わねばならない。最初のものに関しては独断的であるし、次の議論も、たとえ存在の一般的概念が個物に先行したとしても、そのことから精神がいかなるものも無限の観念の内において知覚するという結論は引き出せないであろう。又観念の持つ有効性からする証明も一般的常識からして認めがたい。しかし議論の内容の吟味が我々の直接の目的ではない。問題なのは、彼が「我々はすべてのものを神のうちにみるということにより何を意図していたのか、ということである。このことを考える上で手掛りとなるのは前節でみた彼の見解である。そこでは彼は、観念が完全な認識を与える根拠として神を挙げていた。即ち、「事物を、それらが神のうちにあるという風にみる時、人はそれをつねに非常に完全な仕方で見める。」というわけであった。このことから分ることは、神の内において事物をみるというテーゼの目的の一つが、我々の認識の完全性を裏付けることにあったということである。観念は明晰な認識を与えるというだけでは十分ではなく、その観念によって、事物を神の内にみることにより、我々は完全な認識を得ることができる。

このことと並んで、このテーゼのもう一つの目的は、認識の普遍性を説明することにあるということであろう。即ち異国人達の間においても共通に成立する認識の客観性を根拠付けるものとして、このテーゼが使われているのである。このことは彼の次のような説明をみる時に明確になる。彼は「真理の探究」の釈明において、我々が神の内においてすべてをみるというテーゼを説明するために次のような事例を与えていた。例えば人は誰でも、 $2 \times 2 = 4$ であるとか、彼の犬よりも彼の友を選ばねばならぬということを明白に知る。このことから、誰でもが共通にあづかることの普遍的理性があるはずである。そしてこのような理性は不変で、必然的な性格を持ち、又無限であり、故に普遍的であるということから、神と普遍的理性は永遠の昔から同質的（*co substantialiel*）であると結論する。<sup>30</sup> このようなマルブランシュの説明をみると、彼の「神」が認識における合理的根拠という意味を強く持っていることを指摘することができる。

ここで一つの問題を提起しておこう。それは次のようなことである。マルブランシュは認識の完全性、普遍性を神の名において確保しようとするのであるが、もし認識の完全性、普遍性を根拠付けることだけが目的ならば、もっと別の形態での神の利用がありえたであろうが、なぜ彼は

「神の内においてみる」というような一般には理解し難い立場をとったのかということである。このことは彼の宗教的動機を抜きにしては解釈が不可能であろう。すでに観念の節において、神は「我々の魂を創造する時に、魂とともに観念を作り出したか、或わ神が、人間がある対象を考えるたびごとに観念を造る」という説を排する根拠として、神の摂理の単純性を挙げていたことをみたが、そこにおいて彼はもう一つの理由、即ち「神の内においてみる」という説をとるもう一つの理由を挙げていたのである。それは、そのように考えた方が、人間の神に対する依存度が高まるということであった。神中心主義的なマルブランシュの宗教観を無視しては、「神のうちにいてすべてをみる」という彼の認識論の究極の原理を正しく理解することはできないであろう。むしろ我々は彼が、このテーゼにおいて哲学と宗教の統一を計ったと言うべきであろう。さて「我々はすべてのものを神の内において見る」という時、それは如何なる仕方であるのか。言い換えるならば、神の内において見るということが、如何なる認識のあり方を保証するのかという問題が残る。すべてのものを神の内において見ると言う時、我々は神の内において感覚的認識を持つのだろうか。次節ではこの問題を扱うこととしよう。そこではマルブランシュの認識論の性格が明らかにされるであろう。

##### 5. 観智の延長

前節で我々は、神の内においていかなる認識を得るのかという問題を提起したのであるが、まず感覚的事物の認識についてはどうであろうか。彼はこの件について次のような説明を試みている。まず我々が物質的、感覚的事物を神の内にみるからといって、我々が神の内において感覚を持つとは考えない。神は感覚的事物を認識する (*connaître*) が感覚 (*sentir*) はしない。神は我々に感覚を起こさせるが、それを感覚として受け取るのは我々だけである。感覚とは我々の魂の様態であった。それ故「我々が神の内においてすべてを見る」という時厳密には、神の内における観念（感覚的性質を奪われた）を見ると考えるべきなのである。神の対象が我々に現われる時、神の内にある観念と、我々の意識の様態としての感覚知覚を結びつけることにより、感覚的事物の現実的認識を可能にさせるのである。このようにして我々は感覚的事物を知ることができる。<sup>31)</sup> この説明においては、神の全能（感覚を引き起こすのは神である）をそこなわず、かつ不明瞭なもの（感覚的なもの）を神に帰せしめないようにとするマルブランシュの苦しい努力がうかがわれる。

しかし真理の探究におけるこのような説明に対し、観念による明晰な認識と、感覚によって我々が受け取る認識の関係について鋭い批判がなされた。それは次のようなものである。「凡し知的世界のうちに太陽があるならば、その太陽はつねにそれ自身に等しいであろう。一方目に見える太陽はそれが、地平線に近い方が離れている時より大きく見える。従って人が見るのはこの知的な太陽ではない。他の事物についても同じである。従って人は神の内において神の創造物を見るのではない。」<sup>32)</sup> このような批判に対し、マルブランシュは自己の理論を発展させることにより切り抜ける。即ちここに観智の延長の概念 (*l'étendue intelligible*) が登場する

のである。彼は答える。「私が様々な物体を、我々がそれを表わす (représenter) 神の完全性について持つところの認識によってみると言った時、私は神の内に、個々の特殊な物体を表わすある観念が存在するということを厳密には主張しなかった。」<sup>33</sup> ではマルブランシュはどう考えるのか。彼は神が自らの内に理想的或わ無限に知的な延長 (une étendue idéale ou intelligible infinie) を含むと考えた。そして精神が神の内において、すべての形を知覚することができるのは、この叙智的延長の部分を精神が知覚することによってであるという。それ故、この叙智的延長は潜在的に鳥や木などの知的形体 (figure intelligible) を持つことができるという。「様々に我々の精神に適用 (appliquer) された叙智的延長は、我々が数学的形体についてもつ、すべての観念を与えることができる。同じように我々がこの世界で賞讃するすべての対象を与えることができ、最後に我々の想像が我々に表わす、すべてのものを与えることができる。」<sup>34</sup>

さて、このような叙智的延長を我々はいかに理解すべきであろうか。この叙智的延長は、個物の知的形体を与えることができるとか、「数学的形体について持つすべての観念を与えることができる」と言っていることから推察できるであろうが、我々はこれを幾何学的延長と等置しても間違いはないであろう。彼は事実次のように言っているのである。「幾何学は叙智的延長以外の対象を持たない。」<sup>35</sup> そしてこの幾何学的延長としての叙智的延長を神は自己の内に含んでいるのである。このようにみえてくると、「神のうちにいてすべてを見る」というテーゼは、「すべての事物を幾何学的規定におい見る」というテーゼに翻訳できるであろう。例えばマルブランシュの言うように、我々が太陽を見る時、まず我々は円の観念を神のうちにいて見るのである。そして我々は光の感覚を我々の内において持つのである。このように我々が物質的事物をみる時、まずそれを幾何学的形体、換言するならば距離の関係で捉え、次いで、我々にとってそれが具体的認識となるように、神が我々の魂を変様させることにより、物質的事物の現実的認識が可能となるわけである。神はいわば幾何学的認識の場となっているのである。

さて、ここで最後にマルブランシュの認識論についての簡単な結論を与えておこう。既にみたことをまとめるならば次のようになるだろう。まず彼の認識論の眼目は物質的事物の認識にあるということであり、それは観念を媒介として始めて可能であった。そしてこの観念とは明晰な認識を与えるものに限られた。又観念は完全な認識を与えることができるとされたが、この節で明らかにされたように、完全な認識とは幾何学的規定に基づく認識であった。「我々はすべてのものを神の内においてみる」というテーゼはこの事と等意であった。ただそう述べることによって、このような認識のあり方を根拠付けようとしたわけである。最後に物質的事物を幾何学的規定において捉えること、このことが彼の認識論の根本目的であるということを結論して終わることにしよう。

註

(1)

- ① De la Recherche De la Vérité Tome I préface

以下Rechercheと略す。

- ② ibid Tome I Livre I première partie

- ③ ibid T. I, L. I, P. I.

- ④ Entretiens sur la Métaphysique, V (entretien)

ここで、彼は幾何学の証明などにおいて「見ること」の果たす役割を評価し、さらに、「我々の感覚は我々に真理を理解させることができる」と述べている。

- ⑤ Recherche T. I, L. I, ch I.

- ⑥ ibid Recherche T. I, L. V, ch I.

- ⑦ ibid T. I, L. I, ch I.

- ⑧ ibid T. I, L. I, ch I

(2)

- ⑨ これに関する叙述は、Recherche T. I, L. I, P. II, ch I. においてみられる。

- ⑩ ⑨と同じ箇所。

- ⑪ Recherche T. I, X Eclaircissement, 同じような考え方は、Entretiens sur la métaphysique の I 章でも見られる。そこで彼は「私自身について持っている内的知覚は、私が存在する、私が考える、私が欲する等々ということを理解させるが、私が何であるかは認識させない。即ち私の思惟や意志や感覚等の本性やそれらの関係を認識させない」と述べている。

- ⑫ Entretiens sur la métaphysique I

ここで彼は次のような形で物心分離を行なっている。「私は考えている間は、考えるあるものであるということだけを知っている。さて物体（身体）は考えることができるであろうか。長さや大きさと深さにおける延長が推理したり、欲したり、感じたりすることができるだろうか。疑いなくそれはできない。なぜならかかる延長のすべての存在の様式は距離の関係の内にしかないからである。そしてこれらの関係が知覚や推理や喜びや欲求や感覚、一言で言うならば、思惟（pensée）でないことは明白である。従って考えるこの私は、即ち私固有の実体は物体（身体）ではない。」

- ⑬ Meditations. II.

- ⑭ Recherche T. I, L. I, P. II, ch I.

(3)

- ⑮ Recherche T. I, X Eclaircissement

- ⑯ 省察に対する第二論駁への答弁の付録

- ⑰ 省察に対する第三論駁への答弁

- ⑱ 省察に対する第二論駁への答弁

- ⑲ Recherche T. I, L. I, P. II, ch I.

②① Recherche T. Ⅲ, X Eclaircissement.

②② Recherche T. I, L. Ⅲ, P. Ⅱ, chⅦ

このような考え方は、神が延長だけによってすべてを創造したという存在論によって支えられている。ここで言う「延長が可能であるすべての特性」例えば生命などは実体形相の概念を用いることなく機械的に説明できるという。(Recherche T. I, L. Ⅲ, P. Ⅱ, chⅦ)

②③ Recherche T. I, L. Ⅲ, PⅡ.

②④ Recherche T. I, L. Ⅲ, PⅡ, chⅦ

②⑤ Recherche T. I, L. Ⅲ, PⅡ, chⅦ

そこでは次のように言われている。「観念が作用的である (efficace) ということは確かである。というのはそれは魂の内て作用し (agir) 魂を啓発し (éclairer)、好ましい知覚によって幸福にしたり、不快な知覚によって不幸にしたりするからである。」

(4)

②⑥ Recherche T. I, L. Ⅲ, PⅡ, chⅡ ~ V までが観念の由来に関する諸説に対する批判にあてられている。表題だけを掲げておく。

ch. Ⅱ 物質の対象がそれに似た種 (espèce) を送るのではないということ。

ch. Ⅲ 魂は観念を生み出す力を持っていないということ。

ch. Ⅳ 我々は我々と一緒に創造された観念によって対象をみるのではないということ、又我々 必要あるごとに神が観念を生産するのではないということ。

ch. V 精神は自らの完全性を考察することによって対象の本質や存在を見るのではないということ、このような仕方では神だけである。

②⑦ Recherche T. I, L. Ⅲ, P. Ⅱ, chⅦ この章においてその試みがなされている。以下の引用はすべてこの章からのものである。

②⑧ ibid.

②⑨ ibid.

③① ibid.

③② Recherche T. Ⅲ, X Eclaircissement. ここにあらわれているマルブランシェの考え方は「我々がすべてのものを神の内においてみる」という彼のテーゼをよく説明しているし、そのテーゼがどうして成立するのかに関する彼の説明は、この彼の認識論の根本思想の意図をよく物語っている。

(5)

③③ Recherche T. I, L. Ⅲ, P. Ⅱ, chⅦ

③④ Recherche T. Ⅲ, X Eclaircissement における三番目の批判

③⑤ ibid. (註32) の批判に対する答弁

③⑥ Réponse au livre des vraies et des fausses idées, chⅦ

③⑦ Entretiens sur la Métaphysique I

(哲学(哲学) 博士課程三回生)